

## ルーモールと『料理術の精神』

加 藤 哲 弘

ルーモール (Karl [Carl] Friedrich Ludwig Felix von Rumohr, 1785–1843) の名は、その功績の大きさにもかかわらず、現在それほどよく知られているわけではない。もちろん、美術史学の歴史に興味を持つ者であれば、すてきなされたいいくつかの紹介によってその名を聞いたことがあるだろう<sup>(1)</sup>。またドイツ語圏では、『料理術の精神』が早くから「レクラム文庫」に収録されたこともあって、一般の読書層には浸透していたようである。しかし、これは他の地域においても言えることだが、ただでさえ低いこのルーモールの知名度には偏りがある。美術史学史の研究者が『料理術の精神』に言及することは稀であり、一方、このロングセラーの読者が関心を持つのは、古代の料理をはじめとして当時のイタリアや伝統的なドイツの料理に造詣の深い著者の博識ぶりであって、彼が近代美術史学の基礎を築いた人物であることは、そのときすっかり忘れ去られているのである。

しかし、この2つの業績は、同じ1人の人物によって達成されたものであって、けっして無関係ではない。美術史学の基礎づけと料理や食事についての議論という、一見大きくかけ離れているように見えるこの2つの側面を同じ1つの土台のうえで考察してみると、それがこの論文でわたしが試みたいことである。結論を先取りして言えば、この2つの問題圏域をつなぐのは、この時期に、「啓蒙」的洗練と「未開の自然美」がもつ魅力に注目することで理論的な基盤を確立したばかりの「趣味批判」としての「美学」である。食材から調理法、食事の作法にまで筆がおよぶ『料理術の精神』の著者が、同時に、実証主義的な近代美術史学の成立に重要な役割を果たすことができた理由を、この美学という学問に注目することで説明していきたい。

以下では、まずルーモールの生涯と著作について [第 1 章]、次いで『料理術の精神』の成立事情や概要について [第 2 章] 紹介をしたあと、この書物の歴史的な意義について「美学」の立場から考察を試みる [第 3 章]。

## 1 ルーモールの生涯と著作

ルーモールは、**1785 年 1 月 6 日**、ドレスデンに近い、両親の地所であるラインハルツグリンマで、父ヘニング・フォン・ルーモールと父の 2 度目の妻ヴィルヘルミーネ・カロリーネ・フォン・フェルゼンのあいだに生まれた<sup>(2)</sup>。父の家系は裕福な貴族で、シュレスヴィヒとホルシュタインの公爵領に広大な土地を所有していた。カルルの誕生の後、家族はザクセンから、リュベックに近いローテンハウゼンの地所に戻り、カルルはそこで幼年時代をすごす。早熟のカルルは、家庭教師たちの教育に満足せず、父の広い書斎に閉じこもって読書にふけっていた。それを見た両親はブラウンシュヴァイク公国ホルツミンデンの修道院長に彼を預けるが、当地で接したコレクションに美術への目を開かれたものの、この新しい環境にも彼は満足しなかった。

父の死後にローテンハウゼンの地所を相続し公務に就いたルーモールは、その後、ゲッティンゲン大学で諸言語と歴史を学び、美術史を教える世界で最初の正教授となったフィオリロ<sup>(3)</sup>のもとで素描の手ほどきを受ける。さらに彼は、カッセルやドレスデンにある著名な美術館を訪問して、絵画や版画、素描などに対する基本的な目を養った。また彼は、ゲッティンゲンで知り合った美術愛好家のリーペンハウゼン家の人たちにならって、自らも版画や素描の収集を始める。収集品は、ローテンハウゼンにある彼の実家を飾ることになった。

ハイデルベルクで学業を終えたルーモールは、**1805 年**にイタリアを目指して旅立った。途中に立ち寄ったミュンヘンで詩人ティーク (Ludwig Tieck, **1773–1853**) と出会い、その他の若い友人たちとともにイタリアを旅行する。一行はヴェローナ、マントヴァ、フィレンツェ、シエナを訪れ、最終的にルーモールはローマに落ち着くことにした。ローマで彼は、画家のコッホ (Joseph

Anton Koch, 1768–1839) やラインハルト (Johannes Christian Reinhart, 1761–1847), あるいはフンボルト兄弟 (Wilhelm von Humboldt, 1767–1835, Alexander, 1769–1859) らと親交を結んでいる。

2年間のローマ滞在の後、ルーモールは、親友のティークとともに、ナポリ、フィレンツェ、パルマ、ミラノ経由でミュンヘンに向かい、しばらくの滞在の後、ローテンハウゼンに帰宅する。その後も彼は公務の傍らで、ティークやカロリーネ・シェリング (Caroline Schlegel=Schelling, 1763–1809), ルング (Philipp Otto Runge, 1777–1810), クレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778–1842) とベッティーナ・フォン・アルニム (Bettina von Arnim, 1785–1859), カールス (Carl Gustav Carus, 1789–1869) など、多くの文筆家や芸術家と、招待や訪問あるいは書簡などを通して交流を深めた。彼は生来病弱で、健康にはとりわけ気を遣っていたが、いつも頻繁に自宅に知人を呼んで豪華な食事をした。気ままで激しやすい性格ではあったが、該博な知識と独創的な発想は客の興味をひきつけていた。

ナポレオン軍によるリュベック占領の後しばらくヴィーンとミュンヘンで過ごしたルーモールは、1816年から22年まで再びイタリアに滞在する。さらにその後3度 (1828, 37, 40年に) イタリアを訪れた彼は、その間にプロシア皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルム (のちのフリードリヒ・ヴィルヘルム4世 [1795–1861]) やデンマーク皇太子 (のちのクリスティアン8世 [1786–1848]) らの知遇も受けている。また彼は自ら銅版画制作にたずさわると同時に、若き画家たちの保護者としても重要な役割を果たした。1800年以後に生まれた世代の画家、モルゲンシュテルン (Christian Morgenstern, 1805–1867), フォルマー (Adolph Friedrich Vollmer, 1806–1875), シュペクター (Otto Speckter, 1807–1871), そしてとりわけネルリ (Friedrich Nerly, 1807–1878) に与えた支援についてはよく知られている<sup>(4)</sup>。ネルリはイタリアで活躍し、シュペクターはルーモールによる軽妙な詩『犬と狐の戦い』(1835)の挿絵を担当した。またルーモールは、1816年にイタリアを訪問したときには、当時17歳の若い画家のホルニ (Franz Horny, 1798–1824) を伴っていた。

1842 年、ルーモールは、フリードリヒ・ヴィルヘルム [4 世] からベルリンを訪問して、美術や美術館をめぐる諸問題について助言をするように求められる。しかし、突然の浮腫を病んだ彼は、途中でリュウベックに戻らざるをえなくなる。温泉での治療を考えた彼は、翌 43 年の初夏に、ボヘミアを目指して旅に出た。立ち寄ったドレスデンで彼を診た医者のカールスは、即座に、それ以上旅行することを禁止した。伝えられるところによれば、彼の最期は、偉大なる美食家にふさわしいものだったようである。彼は 7 月 25 日の朝食を摂っていたときに心臓発作に襲われ、食卓で息を引き取る。享年 58 歳であった。

ルーモールの世間的名声を確かなものにしたのは、彼が 1822 年に発表した『料理術の精神』だが、彼の学問上の最大の業績は、1827-31 年に公刊された『イタリア研究』である。ここで彼は、ローマ史研究で知られたニーブール (Barthold Georg Niebuhr, 1776-1831) の方法に依拠しながら、古代から中世、ルネサンス期に至るまでの、ウンブリアやトスカーナを中心としたイタリアの美術に内在する諸問題を、厳密な史料批判を通して解決した。これによって、ヴァザーリ以来の「逸話」の伝統やヘーゲルの思弁を排除した科学的な歴史学としての美術研究の方法が確立されたわけである。このほかにも、ここでは紹介しきれないが、『美術と歴史のためのコレクション』(1816-1823)、『イタリアへの 3 つの旅』(1832)、『ドイツをめぐる備忘回想録』(1832)、『作法の学校』(1834-35) など、多くの評論や随筆、翻訳、さらには軽妙な物語などもある。

## 2 『料理術の精神』

1822 年、ゲーテの全集を出版したことでも知られる老舗の出版社、コッタ書店から『料理術の精神』という、モンテスキューの名著を思わせるタイトルの書物が公刊された。表紙には、著者ヨーゼフ・ケーニヒ、監修編集 C・F・フォン・ルーモールとある。しかし、1832 年に出た第 2 版の序文で明かされ

ることになるわけだが、この本をじっさいに執筆したのはルーモール自身であった。ケーニヒは実在する人物、すなわちルーモールに仕えていた個人料理人[Mundkoch]である<sup>(5)</sup>。この職に就く者は、つねに主人に付き従い、主人の食事を準備するだけではなく、毒見役も引き受ける。主人の信頼の厚い重要な職である。

ルーモールが、自らの使用人とはいえ別人の名前でこの書物を出版した理由は、あまり明確ではない。本名を著作の中で明らかにしながらない貴族たちの古くからの慣習に従ったため、あるいは、ルーモール自身が「出版者の序文」で示唆しているように、当時のドイツでは知識人が食事や料理に言及することは適切ではないとみなされていたためかもしれない。また、これもルーモール自身が第2版への序文で書いていることだが、料理人のケーニヒを経済的に援助するという「慈善的」な理由もあったようだ。初版の出た1822年は、ルーモールが6年間の滞在を終えてイタリアから帰国したばかりの年であった。この年に彼はオレヴァーノで盗賊に襲われており、連れていたホルニが夭折してしまったことについても悩んでもいた。気分を変えたいという気持ちがあったのかもしれない。

全体の構成は大きく3つの部分から成っている。第1部には「料理術の基本要素と動物性の食材」、第2部は「植物界から得られる食材と調味料」、第3部には「食事について」というタイトルが付けられている。19の章から成る第1部では、料理術の定義から始まり、調理器具や調理室の由来や本来的な使用法を解説した後、「人間にとって最も原始的な調理法」である「あぶり焼き」から「煮物」「揚げ物」など、動物性の食材の加熱法に言及していく。また、13の章から成る第2部では、まず穀物（小麦粉、パン、シリアル、粥類）、次いで野菜、香辛料、砂糖、果物、菓子に話題が及ぶ。そして、6（初版では5）の章から成る第3部では、文明人としての食事のマナー、子どものしつけ、食事の量や食卓でのタブー、理想的なメニュー構成などが語られる。

本文では、冷静で合理的で、図鑑ないしは<sup>カタログ</sup>「目録」風に整理された文章が淡々と続く。古代の食事や料理についての該博な知識、度重なる旅行で訪れた

さまざまな国や地域（とくにイタリア）での食事の経験，帰国時にミュンヘンで集めたバイエルンの伝統的な郷土料理についての情報などにもとづきながら，余計な逸話はできるだけ省いて，食材とその調理法を，種別的に分類し，歴史的ないしは地域的な広がりの中から列挙していくというのがルーモールの基本的なスタイルである。ルーモールの主張内容をよく伝えている箇所をいくつか引用してみよう。

栄養があるという状態は，どのような事情があっても，しかし実際には残念ながらもしばしば生じることだが，過剰に作為的な調理によって抑圧されたり破壊されることがあってはならない。その逆に，わたしたちはこの状態を維持し発展させ高めていくことへの努力を絶えず続けなければならないのである。基本的な食材が持つ栄養状態を調理以前に低下させてしまうことも，まさに同じ理由で避けなければならない（第1部第2章）。

恋茄子（トマト）は南欧でソースやスープの調味に用いられる。トマトを使えば，快い酸味と美しい橙色が伝わってくる。大量に摂取すれば，血液を濃くすることもできる。なぜドイツでは風味の良いこの実の栽培が試みられていないのか，わたしにはわからない（第2部第10章）。

食物の調理を基本原則にまで遡り，その原則の適用を実例を用いて説明してきたわけだが，それだけではまだ充分ではない。あらゆる料理術は，健康に生きているという実感を高めて，いつもそれを維持しておくというその目的を実現しなければ，役立たずの仕掛けでしかない。この状態は，思慮のある食べ方によってはじめて達成されるものである。思慮ある食べ方は，一見するとたんに自然に与えられるだけのもののようにも見えるが，じっさいには，人間の重要な技のひとつであって，ふつうに考えられている以上の教養を前提とする（第3部第1章）。

あるいは、ルーモールの主張を端的に表しているのは、表紙に掲載されたプリニウスからの引用かもしれない。

さてここからは、自然の産物のなかでも最高のものを検討することにしよう。お話するのは、人間にとって栄養となるものについてである。人は自らが何によって生きているのかということに気がつかない。以下の記述は、その無知を認めさせるものである。いかなる人であれ、用語の卑近さのために誤解をして、これから述べる話題が取るに足らない卑俗なものであるとみなさないようにしていただきたい（『博物誌』第 20 書）。

### 3 歴史的意義

『料理術の精神』が執筆された 19 世紀の初頭は、農業生産技術の向上、植民地産物の流入、都市化によるレストランの増加などの経済事情を背景に、「料理書の時代」と言われるほどに多くの食事学や料理論の本が出版された時期である。ド・ラ・レイニエール（Grimod de la Reynière, 1758–1837）の『美食家の暦』（1803）、ボーヴィリエ（Antoine Beauvilliers, 1754–1817）の『料理人の芸術』（1814）、カレーム（Marie Antoine Carême, 1783–1833）の『王様のパティシエ』（1815）、そしてとりわけ有名なブリア=サヴァラン（Jean-Anthelme Brillat-Savarin, 1755–1826）の『味覚の生理学（美味礼賛）』（1825）などがそうである。ルーモールはこれらに時おり言及しながら（ブリア=サヴァランの書物に対しては第 2 版で迅速に対応して）記述を進めているわけだが、これらの諸著作と比べても、『料理術の精神』の特徴は際立っている。

とくに『味覚の生理学』との対比は、きわめて興味深い。前節の引用からも明らかに認められるように、『料理術の精神』には、自然の素材、とくに全体でも多くのページを割いている野菜の重視、過剰な調理への反発、健康を意識した栄養学的視点などが強く窺われる。これに対して、『味覚の生理学』で強

調されるのは、ジビエなどの肉料理、栄養よりも快楽を重視する美学的視点、「美食家判定器」などである。もちろん、共通点を見逃してはならない。何よりも重要なのは、両者がともに、「科学的な記述」を意識するとともに、食事や食事のなかで大きな役割を果たす味覚（趣味）を社交的ないしは社会的なものだとみなしている点である。

ここで当然思い出しておかなければならないのは、カントの『判断力批判』における趣味の理論である。じつはブリア=サヴァランの著作に付されたサブタイトル（**Meditations de gastronomie transcendante**）がすでに、カントとの結びつきを示唆している。ブリア=サヴァランは、この書で、直接に「味覚」（感覚）を分析することで、その（超越論的ではないとしても）生理学的な考察を試みている。一方、ルーモールの書物には、感覚についての分析はあまり見当たらない。その代わりにあるのが、食材処理をめぐる的確な指示や、食物が栄養として摂取されるときに理想的な、つまり健康を害さないプロセスの提示である。しかし、ここでも食事へのアプローチに経験的で科学的な手法が採られていることに変わりはない。

あるいは『味覚の生理学』だけではなく、『料理術の精神』を読んでも、そこで語られている「料理の技術」が、カントのいう「快適感を演出する技術（**angenehme Kunst**）」に近いものだと感じられてくるかもしれない。しかし、ルーモールが主張している「料理術」は、感覚的な「享楽」のためのものではない。むしろ、ここで（たとえば第3章でとくに）強調されているのは、社会的な常識としてのマナーを身につけることで食事環境に配慮せよということだ。「共通感覚」としての「趣味」が食卓にも必要であることをルーモールは主張しているのである。タイトルに含まれる「術」は、彼自身が冒頭で述べているように、詩や美術などの芸術とのつながりのなかで理解されるべき概念なのである。

料理の術とは、人間に栄養を与えて活気づけるのに適した自然の素材を、火と水と塩を用いて、滋養に富み気分を爽快にさせてくれる楽しい性



質を持ったものに変えていくことのことである。したがって、ホラティウス  
の有名な言葉に「有用性に優美さを混ぜ合わせよ」というものがある  
が、この言葉は、とかくそうされがちなように、詩や美術という、役に立  
たないことこの上なく、また完全に一面的としか言えない芸術にではな  
く、まさにこの料理術に対してのみ適用されるべきものである  
(第1部第1章「料理術の概念」)。

もう1点、ここで指摘しておきたいのは、この書物と、ルーモールが『イ  
タリア研究』で達成したとされている「美術史学の基礎づけ」との関係であ  
る。

上記の引用箇所ですぐ続いて、次のようなことが語られている。

ちなみに、さまざまな時代や流派の料理術では、このうちのいずれかの  
特質が支配的になっている。というわけで、料理においても、芸術の場合  
と同じように、厳格な様式、優美な様式、輝きを放つ様式といったものを  
仮定することもできるだろう (第1部第1章「料理術の概念」)。

ルーモールは、料理術を論じているときもイタリアの絵画や古典古代の詩を  
分析しているときも、基本的な姿勢を変えていない。彼にとって、料理術研究  
は、料理の様式(文体)研究であり、その様式を直感的な形態として成り立た  
せている諸要素を列挙しながら、歴史的時間や地理的空間の中に位置づけてい  
くことに他ならない。彼にとって、食物の内容(味)は、もしかしたら二の次  
の問題なのかもしれない。ここで重要なのは、ヴァザーリ的な逸話を語るこ  
とではなく、ヘーゲル的な「精神」論にふけることでもない。ルーモールが目指  
していたのは、想像上の古典古代がそうであったように、合理的で単純な文体  
(料理術)が醸し出す高貴な印象であったと言えるだろう。

#### 4 「啓蒙」と「未開」の美学史から

すでに別の箇所で論じたように<sup>(6)</sup>、『判断力批判』におけるカントの「美学」は、「啓蒙」と「未開」、あるいは「趣味」と「天才」という相反する2つの立場のあいだで微妙なバランスを取ることで成立していた。カントより1世代あとに活躍するルーモールにも、わたしたちは同じような傾向を確認できる。ルーモールは、カントの美学におけるカスティリオーネとルソーの伝統とともに受け継ぎながら、貴族的洗練と自然回帰という、一見矛盾に満ちた2つの志向を両立させようとしているように思われる。

ルーモールの業績を一言で特徴づけることは難しい。彼は、美術史家、鑑定家、批評家、文筆家、収集家、美術愛好家、芸術保護者、美術館助言者、素描家、銅版画家、そして美食家、栄養学的美味学者など、きわめて多くの肩書きで呼ぶことができる。しかし、すでに見てきたように、これらの多様な側面は、すべてまったく無関係のものではない。そのすべては、同じ1人の人物であるルーモールが、相反するものを同時に両立させながら、わたしたちに見せていた横顔なのである。

#### 注

- (1) 吉岡 1972 ; 1975, 太田 1984. この他にも重要な参考文献を末尾に掲載した。
- (2) ルーモールの生涯と著作の詳細については、末尾にまとめた。また、この章および年譜の記載については、以下の文献などを参照。Tarrach 1921, Yeomans 1993, Dirk 2000, Hauer 2005.
- (3) フィオリロについては、加藤 2002 を参照。
- (4) Hirschfeld 1931 および Gädeke 1991 を参照。
- (5) 以下の文献には「個人調理人」であったヨーゼフ・コッホをルーモールが描いた素描が掲載されている。Hirschfeld 1931, S. 261, Anm. 2, Abb. 2, S. 262.
- (6) 加藤 2004 を参照。

#### 著作リスト

*Sämtliche Werke*, Carl Friedrich von Rumohr. Hg. v. E. Y. Dilk. Hildesheim [u.

- a.] : Olms-Weidmann, 2003.
- Erläuterung einiger artistischer Bemerkungen in der Rede des Herrn Hofrath Jacobi über den Reichthum der Griechen an plastischen Kunstwerken.* München : Stoger, 1810.
- Ueber die antike Gruppe Castor und Pollux oder Von dem Begriffe der Idealität in Kunstwerken.* Hamburg : Perthes, 1812.
- Denkwürdigkeiten der Kunstaussstellung des Jahres 1814.* München : Fleischmann, 1815.
- Sammlung für die Kunst und Historie.* Hamburg : Perthes, 1816–1823.
- [König, Joseph von.] *Geist der Kochkunst.* Überarb. u. hrsg. von C. F. von Rumohr. Stuttgart [u. a.] : Cotta, 1822.
- Italienische Novellen von historischem Interesse.* Übers. und erl. von C. F. von Rumohr. Hamburg : Perthes & Besser, 1823.
- Italienische Forschungen.* Berlin und Stettin : Nicolai, 1827–1831. 3 v.
- Ursprung der Besitzlosigkeit des Colonen im neueren Toscana.* Hamburg : Perthes & Besser, 1830.
- Ueber Raphael und sein Verhältnis zu den Zeitgenossen.* Berlin [u.a.] : Nicolai, 1831.
- Über den gemeinschaftlichen Ursprung der Bauschulen des Mittelalters.* Berlin [u.a.] : Nicolai, 1831.
- Drey Reisen nach Italien.* Leipzig : F. A. Brockhaus, 1832.
- Deutsche Denkwürdigkeiten aus alten Papieren.* Hrsg. von C [arl] Fr [iedrich] v. Rumohr. Berlin : Duncker & Humblot, 1832.
- Ein Band Novellen.* München : Georg Franz, 1833.
- Schule der Höflichkeit für Alt und Jung.* Stuttgart [u.a.] : Cotta, 1834–1835.
- Kynalopekomachia : Der Hunde Fuchsenstreit.* Hrsg. von C. Fr. v. Rumohr. Mit sechs Bildern von Otto Speckter. –[1. Ausgabe]. –Lübeck : Rohden, 1835.
- Geschichte der königlichen Kupferstichsammlung zu Copenhagen : Ein Beitrag zur Geschichte der Kunst und Ergänzung der Werke von Bartsch und Bruliot.* Hrsg. von C. F. von Rumohr u. J. M. Thiele. Leipzig : Anstalt für Kunst und Literatur Weigel, 1835.
- Hans Holbein der Jüngere in seinem Verhältniss zum deutschen Formschnittwesen.* Leipzig : Anstalt für Kunst u. Literatur, Weigel, 1836.
- Zur Geschichte und Theorie der Formschneidekunst.* Leipzig : Anst. für Kunst und Literatur, 1837.
- Reise durch die östlichen Bundesstaaten in die Lombardey, und zurück über die*

*Schweiz und den oberen Rhein, in besonderer Beziehung auf Völkerkunde, Landbau und Staatswirthschaft.* Lübeck : Rohden, 1838.

*Untersuchung der Grunde für die Annahme, das Maso di Finiguerra Erfinder des Handgriffes sei, gestochene Metallplatten auf geätztem Papier abzdrukken.* Leipzig : Anst. für Kunst u. Literatur, 1841.

*Der Kampf demokratischer und aristokratischer Principien zu Anfang des sechzehnten Jahrhunderts.* Dargestellt in 3 Monographien des J [ean] J [acquies] Altmeyer. Aus d. Franz. [Übers. : B. J. A. Meyer]. Mit e. Vorw. von C [arl] F [riedrich] Rumohr. Lübeck : Rohden, 1843.

#### 書簡集

*Aus dem Briefwechsel Friedrich Wilhelms IV. mit Carl Friedrich von Rumohr.* Mitgeteilt v. Friedr. Stock. [Berlin] : [Grote], 1914 (Jahrb. d. Kgl. Preuss. Kunstsamml. ; 35. Beih.).

*Rumohrs Briefe an Robert von Langer. Eingel. u. hrsg. von Friedrich Stock.* Charlottenburg : Munin, 1919.

*Rumohrs Briefe an Bunsen über Erwerbungen für das Berliner Museum.* Mitgeteilt von Friedrich Stock. Berlin : Grote, 1925.

*Briefe Rumohrs an Otfried Müller und andere Freunde.* Mitget. von Friedrich Stock. Berlin : Grote, 1933.

*Briefe Rumohrs.* Mitget. von Friedrich Stock. Berlin : Grote, 1943 (*Jahrbuch der preußischen Kunstsammlungen* : Beiheft ; 1943).

*Briefe an Johann Georg Rist.* Hrsg., komm. und mit drei Nachträgen versehen v. Gerhard Kegel. Buchholz/Nordheide : Selbstverl. d. Hrsg., 1993.

#### 引用文献

Bickendorf, G. *Der Beginn der Kunstgeschichtsschreibung unter dem Paradigma "Geschichte"* : Gustav Friedrich Waagens Frühschrift "Über Hubert und Johann van Eyck". Worms : Werner, 1985.

Bickendorf, G. "Die Tradition der Kennerschaft : von Lanzi über Rumohr und Waagen zu Morelli". In : Agosti, G. (Hg.), *Giovanni Morelli e la cultura dei conoscitori : atti del convegno internazionale*, Bergamo, 4-7 giugno 1987, Bergamo : Lubrina, 1993, pp. 25-47.

Bickendorf, G. "Des mauristes à l'école der Berlin : vers une conception scientifique de l'histoire de l'art". In : Pommier, É. (Hg.), *Histoire de l'histoire de l'art* [Conférences et colloques : 2. XVIII<sup>e</sup> et XIX<sup>e</sup> siècles : cycles de confé-

- rences organisés au Musée du Louvre par le Service Culturel du 24 janvier au 7 mars 1994 et du 23 janvier au 6 mars 1995], Paris : Klincksieck, 1997, pp. 141–175.
- Bickendorf, G. *Die Historisierung der italienischen Kunstbetrachtung im 17. und 18. Jahrhundert*. Berlin : Mann, 1998.
- Bickendorf, G. “Kunstgeschichte als historische Wissenschaft”. In : *Kunsthistorische Arbeitsblätter*, 2002, No. 7/8, S. 35–44.
- Bickendorf, G. “Visualität und Narrativität : Rumohrs “Italienische Forschungen” in einem methodischen Spannungsfeld”. In : Kern, M. et al. (Hg.), *Geschichte und Ästhetik : Festschrift für Werner Busch zum 60. Geburtstag*, München [u.a.] : Deutscher Kunstverlag, 2004 a, S. 362–375.
- Bickendorf, G. “Deutsche Kunst und deutsche Kunstgeschichte : von Winckelmann bis zur Berliner Schule”. In : Schilp, Th. (Hg.), *Dortmund und Conrad von Soest im spätmittelalterlichen Europa*, Gütersloh : Verlag für Regionalgeschichte, 2004 b, S. 29–44.
- Dilk, E. Y., *Ein “practischer Aesthetiker” : Studien zum Leben und Werk Carl Friedrich von Rumohrs*. Hildesheim [u.a.] : Olms, 2000.
- Espagne, M. (Hg.), *Pour une “économie de l’art” : l’itinéraire de Carl Friedrich von Rumohr*, textes rassemblés par Michel Espagne. Paris : Editions Kime, 2004.
- Gädeke, Th. (Hg.) (Kat.Ausst.), *Friedrich Nerly und die Künstler um Carl Friedrich von Rumohr* [Schleswig-Holsteinisches Landesmuseum, Kloster Cismar ; Landesmuseum Mainz, 14. 7.–1. 9. 1991]. Schleswig [u.a.] : Schleswig-Holsteinisches Landesmuseum [u.a.], 1991.
- Hauer, Th. (Hg.), *Das Geheimnis des Geschmacks : Aspekte der Ess- und Lebenskunst*. Frankfurt am Main : Anabas, 2005.
- Hirschfeld, P. “Rumohr und Nerly : Bemerkungen zu einer Porträtzeichnung und Verzeichnis von Rumohrs Radierungen”. *Jahrbuch der Preußischen Kunstsammlungen*, Bd. 52, 1931, S. 258–266.
- Hueck, I. “Archivforschungen zu einer Geschichte der italienischen Kunst : Carl Friedrich von Rumohr, Johannes Gaye, Karl Frey. In : Seidel M. (Hg.), *Storia dell’arte e politica culturale intorno al 1900 : la fondazione dell’Istituto Germanico di Storia dell’Arte di Firenze* [Kongr. : Wissenschaft, Kunst und Forschungspolitik um 1900 ; (Firenze) : 21.–24.5.1997], Venezia : Marsilio, 1999, pp. 119–129.
- 加藤哲弘「成立期の美術史学とコレクション：フィオリロの場合」『西洋美術研究』8,

2002, pp. 158–170.

加藤哲弘「バリのアメリカ先住民：カントの『判断力批判』における具体例の役割」『美学論究』19, 2004, pp. 1–13.

Kjarboe, J. “Carl Friedrich von Rumohr und Dänemark: ein Beitrag zur dänischen Museumsgeschichte”. In: *Nordelbingen*, 72, 2003, S. 55–108.

Mildenberger, H. “Carl Friedrich von Rumohr und Franz Horny”. In: Hohl, H. et al (Hg.) (Kat.Ausst.), *Franz Theobald Horny: ein Romantiker im Lichte Italiens* [Kunstsammlungen zu Weimar, 11.10. 1998–29. 11. 1998; Hamburger Kunsthalle, 11. 12. 1998–14. 2. 1999], Berlin: G+H-Verlag, 1998, S. 21–43.

太田喬夫「ルーモールについて：19世紀初期の美術史と芸術理論の一考察」『1982/83年度科研総合研究 A, 美学と芸術学の問』1984, pp. 65–79.

Pia, Müller-Tamm, *Rumohrs “Haushalt der Kunst”*. Hildesheim [u.a.], Olms, 1991.

Prange, R. *Die Geburt der Kunstgeschichte: Philosophische Ästhetik und empirische Wissenschaft*. Köln: Deubner, 2004.

Rehm, W. “Rumohrs Geist der Kochkunst und der Geist der Goethezeit”. In: *Festgabe für Eduard Berend zum 75. Geburtstag am 5. Dezember 1958*. Hrsg. von Hans Werner Seiffert und Bernhard Zeller. Weimar, 1959, S. 210–234. Zitiert nach: Walter Rehm: Späte Studien. Bern; München, 1964, S. 97–121.

Schönwalder, J. *Ideal und Charakter: Untersuchungen zu Kunsttheorie und Kunstwissenschaft um 1800*. München: Tuduv, 1995.

Schönwälder, J. “Johann Dominik Fiorillo und Carl Friedrich von Rumohr”. In: Antje Middeldorf Kosegarten, A. M. (Hg.), *Johann Dominik Fiorillo, : Kunstgeschichte und die romantische Bewegung um 1800* [Akten des Kolloquiums “Johann Dominicus Fiorillo und die Anfänge der Kunstgeschichte in Göttingen” am Kunstgeschichtlichen Seminar und der Kunstsammlung der Universität Göttingen vom 11.–13. November 1994]. Göttingen: Wallstein, 1997, S. 388–401.

Schroeder, B. “Der Kunstkennerstreit: Hirt, Rumohr und Waagen”, In: Hirt, A. et al. (Hg.), *Archäologie, Historiker, Kunstkenner*, Laatzen: Wehrhahn, 2003, S. 153–171.

Schulz, H. W. *Karl-Friedrich von Rumohr, sein Leben und seine Schriften*. Nebst einem Nachwort von Carl-Gustav Carus. Leipzig; Brockhaus 1844.

Tarrach, A. “Studien über die Bedeutung Carl Friedrich von Rumohrs für

Geschichte und Methode der Kunstwissenschaft". *Monatshefte für Kunstwissenschaft*, 14, 1921 (1), S. 97–142.

Yeomans, B. "Translator's Introduction". In: Karl Friedrich von Rumohr, *The Essence of Cookery*. London: Prospect Books, 1993, pp. 7–37.

吉岡健二郎「ルーモール」『芸術的世界の論理』（京都大学美学美術史学研究会編）東京：創文社，1972，pp. 41–49.

吉岡健二郎『近代芸術学の成立と課題』東京：創文社，1975.

#### ルーモール年譜

1785 1月6日，ドレスデン近郊のラインハルツグリンマで生まれる。

1803 父の死。遺産を相続し公務に就く。

ゲッティンゲン大学のフィオリロのもとで美術を学ぶ。

1804 カトリックに改宗。

1805 イタリアに旅行。ローマに滞在。美術を鑑賞し料理を賞味する。

1807 ミュンヘン経由でローテンハウゼン（リューベック近郊）に帰宅。

1808 ベルナドットによるリューベック占領。ヴィーンに逃れる。

1810 ミュンヘンを訪れ，銅板画を制作。リューベックに戻る  
ギリシア彫刻について論じた最初の著作を出版。

1813 銅版画家になる夢をあきらめる。

1816 再度イタリア訪問。22年まで滞在。1828, 37, 40年にもイタリア訪問。  
『美術と歴史のためのコレクション』（－1823）

1822 『料理術の精神』初版

1825 ブリア=サヴァラン『味覚の生理学』

1827 『イタリア研究』（－1831）

1832 『料理術の精神』第2版

『イタリアへの3つの旅』『ドイツをめぐる備忘回想録』

1834 『作法の学校』（－1835）

1835 『犬と狐の戦い』『コペンハーゲンの王立銅版画収集の歴史』  
デンマーク王子（のちのクリスティアン8世）侍従となる（－1836）。

1836 『ドイツ的形態形成との関係で見たハンス・ホルバイン（子）』

1840 フィレンツェとシエナで，プロシア皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムに美術品の解説。

1842 ローテンハウゼンの地所を売却し，リューベック市内に住む。

1843 7月25日，静養のためボヘミアに向かう途中，ドレスデンで没。享年58歳。